



# いずみ

No.54

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 24



《希望の種》

蕪澤 淳一

(2 ページに「作者の言葉」)

## 自作自選 24 作者の言葉

「ハルカヤマ藝術要塞 2011」に出品した作品です。中央に配置した自然石をたくさんの鉄棒で支えるという構成になっています。鉄棒は時間の経過と共に酸化（腐食）し、やがては姿を失うことでしょう。そして、中央に配置されている自然石だけが残ることになります。それがいつになるかはわかりません。その時、社会が希望に満ちたものであってほしいという願いを込めて制作しました。（菫澤 淳一）

タイトル：「希望の種」

制作年：2011年

素材：鉄棒、自然石

サイズ：W170×D170×H170 cm

（本体のサイズ）

設置場所：ハルカヤマ藝術要塞会場

（小樽市銭函）

## 連載 宮の森の四季 24

### 本郷新記念札幌彫刻美術館

#### 彫刻美術館のことを少しだけ

業務係 大場 裕子

今年度の彫刻美術館は職員の異動もあり、新たな顔ぶれでスタートしました。どの職員も誠実な仕事ぶりで、日常の受付はもとより、事業の広報チラシのデザイン、資料づくり、イベントの進行、駐車場の誘導、清掃までこなす優秀なメンバーです。

それぞれ、豊富な経験や語学力などスキルが高く、個性も発揮していただきながら、館長をリーダーとした体制で着々と事業を進めております。

11月3日、「文化の日」のサンクスデーはスタッフが一丸となり、何から何まで手作りのイベントとなりましたが、400人近くの来館者が訪れてくださいました。

事前の準備に知恵をしぼり、当日は体力も勝負の1日となりましたが、チームワークも抜群で、最後には池田館長のサプライズでお手製の焼き菓子をいただき幸せな終幕となりました。

私自身も初心に帰り、仕事に邁進して参る所存でございますので、館共々今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



## 社会的包摂と美術館

北海道大学名誉教授

木村 純

博物館のボランティアの方たちと続けている「博物館と生涯学習研究会」では、仲間のボランティアが高齢により認知症になったり身体が不自由になった時にどう対応したらよいかということが話題になります。「その方が自分で続けたいと考えている限りは、その方がどうしたらボランティア活動を続けることができるかを周りの方と一緒に考えることが必要です」と言うのが私の考えです。障がいを持った方がボランティアをしたいと来られた時には、どうしたらその方たちにボランティアをしてもらえるかを皆で考えなければならないと思うのです。車いすのボランティアが来館者を案内し、その車いすをボランティア仲間や来館者が押すことがあってよいのです（始める際にクリアすべき課題はあるのですが）。

このような問題には、二つのアプローチがあります。一つは「ユニバーサル・ミュージアム」であり、もう一つは美術館・博物館による「社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）」の取り組みです。「ユニバーサル・ミュージアム」とは、障がい者・非障がい者にかかわらず利用できるユニバーサル的な（すべての人に利用可能な）ミュージアムを目指す姿勢を示す日本の造語です。一方、「社会的包摂」については、社会的に排除されてきた人々（低所得者、失業者、身体障がい者、少数民族、移民、高齢者など）を包みこんだコミュニティの再編成を目指すことであり、これまで美術館・博物館に関心を持ってこなかった人々への働きかけに加えて、上記の人々への対応が試みられるようになったのです。

その具体化として、「ハンズ・オン」や「ソー

シャル・ビュー」、「回想法」があります。「ハンズ・オン」は、ハンズ・オフ（手を触れてはいけない）ではなく、どんどんさわって自分で確かめる体験学習のことです。代表的な取り組みには国立民族学博物館の企画展「さわる文字、さわる世界」（2008年）や吹田市立博物館の「祈りの美—仏像—展」（1993年）に始まる取り組みがあります。「ソーシャル・ビュー」とは、視覚に障がいがある人と一緒に美術鑑賞をすることです。水戸美術館のワークショップ「session!」では、見えない人と見える人が5～6人で作品の前に立って、見える人がその作品について見えたもの、想像できることを言葉にしていくことに対し、ときどき見えない人が質問を投げ、その対話が重ねられるなかで見えない人の持つイメージが次々に更新されていき、それを見えない人が言葉にすることによって、見える人がその作品の見方について新たな発見をすると共に、見える人と見えない人が作品のゴール（印象や思考）を共有する「観賞法」です。「回想法」は館の資料を活用して、高齢者が歩んだ人生を振り返り、その意義を見出そうとする「回想」を聴き手が共感・受容することによって、話し手の心の安定や対人関係についての積極性を実現させるものです。北名古屋歴史民俗資料館の「モノ語りの博物館講座」等のプログラムがあります。道内では、今年、共和町の西村計雄美術館が写真家の前川茂利氏の「開拓地のくらし」展を通じて、戦後開拓下のくらしを高齢者と回想する取り組みが生まれています。

<おわび>前 53 号の本欄で、坂胆道は「坦道」の、また、好川範之は「之範」の誤りでした。訂正してお詫びします。

## 友の会主催シンポジウム 2015

### 「野外彫刻を創る・守る」開催

#### 専門家を交え活発な論議



彫刻作家、研究者の全国組織「屋外彫刻調査保存研究会」（東京）と彫刻美術館友の会が共催で開いたシンポジウム 2015「野外彫刻を創る・守る」が10月4日、北海道立近代美術館を会場に開かれた。「身近な彫刻が泣いている」をキャッチフレーズに、野外彫刻の劣化問題と保全対策の在り方をテーマに活発な討議を展開した。シンポジウ

ムには屋外彫刻調査保存研究会の藤嶋俊會会長、田中修二大分大教授、黒川弘毅武蔵野美大教授らに加え、友の会側からも橋本信夫会長、彫刻家の國松明日香氏など合わせて13人が登壇し、寺嶋弘道・道立近代美術館学芸副館長の総合司会で午前の研究発表、午後はパネルディスカッションで論議を盛り上げた。

冒頭の基調講演で田中修二氏は「北海道における彫刻の歴史」と題して、アイヌの造形や北海道を生まれ故郷にしながら東京を拠点にした彫刻家、道内で活躍した彫刻家たちの彫刻表現の中に地域性をどのように考えるかは野外彫刻を考えるうえで重要なことであると指摘した。

研究発表で黒川弘毅氏は「ブロンズ彫刻の保存と大気汚染」についてブロンズ像に悪影響を与える「乾性沈着」現象のメカニズムを解説し、その除去方法の確立と排ガス規制によって大気中の窒素酸化物が減少したが、むしろ、中国からの汚染物質のグローバル化が心配だと訴えた。次いで、ブロンズスタジオ経営の高橋裕二氏は専門的な立場からコンクリート彫刻の保存措置、修復方法に効果的な材料を具体的に列挙した。また、彫刻美術館友の会の高橋大作氏は、コンクリート彫刻の調査、データ解析を通して、自治体などによる彫刻作品管理の一元化、標準化の必要性を強調した。

午後の部のパネルディスカッションで橋本信夫友の会会長は同会が取り組んでいる彫刻データベースの活用や彫刻作品の維持管理に関連して耐久文化財としての彫刻の補修・保存体制の確立の必要性を強調。屋外彫刻調査保存研究会運営委員である篠崎未来氏が大分市の屋外彫刻メンテナンス活動を、仙台市職員で仙台市彫刻のあるまちづくり応援隊の村上道子氏が同市での彫刻ボランティア養成講座開設と彫刻のあるまちづくり応援隊の活動状況を報告した。友の会の奥井登代氏は同会の彫刻調査、清掃、保存、教育活動について幅広くリポート、彫刻制作者の立場から札幌の彫刻家・國松明日香氏が具体例を挙げながらパブリックアート設置後のメンテナンス予算の確保を訴えた。一方、彫刻を管理する行政の立場から、札幌市文化局の川上佳津仁文化部長は作品修復に関する予算確保の課題を列挙しつつ野外彫刻の魅力発信に取り組んでいると述べた。最後に「石の作家」を自任する札幌の彫刻家・渡辺行夫氏は、時というノミがさらに石を美しく削ってくれるという考えから「経年美化」というユニークな発想を披露してディスカッションを終えた。

（コメントは事前提出のレジュメによって構成した＝編者）



← 発言者（順不同）

## “あとかき” シンポジウム 2015 「野外彫刻を創る・守る」

### 彫刻シンポジウムでモデリングできたこと

シンポジウム総合司会者 寺嶋 弘道

(北海道立近代美術館学芸副館長)

モノには命がある。そのことを改めて考える一日だった。堅牢で不滅に思える石や金属でさえ、長い年月の果てには劣化し風化して朽ちてゆく。古代遺跡にはそれゆえの美があり、一方、現代彫刻の輝きも永遠ではない。

素材の性質、経年劣化、環境や気象の影響、大気汚染による風化と損壊、メンテナンスの不備、人為的な破壊や所有者による改変、文化的受容と盛衰、文明の終焉。人間精神の結晶たる芸術作品は、歴史の波に抗うことはできない。明治以降の欧化施策の所産である近代彫刻も、高度成長期以降のブームを経た野外彫刻やモニュメントも、その一部の作品は延命措置を講じなければならない事態なのだ。

今回のシンポジウムでは、創作と修復と自治活動のそれぞれの現場から意義ある報告がなされ、地域の文化遺産の保存という芯棒にモデリングすることができた。これを機に、保全フレームをどう形づくるか、今後一層の議論が必要だろう。みんなで守るといふ社会保存の意識を共有できた一日であった。

### 親友國松君の話から感じたこと

彫刻家 本田悦久

彼の作品<北の翼>は、コールテン鋼という素材(表面に出る錆によって作品を保護する)を使い、北海道の厳しい気象条件を克服している。

それに対し、彼の紹介してくれた<ビーンズ>という作品は徹底して磨き上げられたステンレスが、その輝きを半永久的に見せてくれるように思えたが、それでもやはり手の届かない接地面などで、雨水が入り影響が出るのではないだろうか。

ここで制作者が作品の設置に立ち会うことは勿論だが、その素材・工法にもさらに熟知することが求められよう。いわゆる、撥水性という観点から考えたとき、金属全般では徹底した研磨がその究極的な結論の一つになるのかもしれない。

ただ、もしこの考え方がある程度現実的で正しいのであるならば、木の場合も、その親水性を止めて太陽光(紫外線など)を遮断する方法が確立されたとき、美しい木肌が残されることにならないだろうか。たとえ朽ちることを前提としなくとも。國松君の話は、彫刻家への新たな問題提起であったように思う。

少しでも多くの屋外彫刻が、幸せなパブリックアートとして市民に親しまれることを願いつつ、貴会の今後のさらなる進展を期待している。

### 思い出の札幌

仙台彫刻のあるまちづくり応援隊 村上道子

札幌は雨だった。夕方、傘をさしてコンサートホール Kitara に向かう。第 581 回定期演奏会でラフマニノフを聴いた。プログラムの表紙が國松登の<星月夜>だった。シンポジウムで明日香さんにお会いするのが楽しみ。

実は、小、中、高と札幌で、有島武郎のリンゴ園近くの平岸に住んでいた。

仙台市が 24 年間毎年 1 作品ずつ注文制作の彫刻を設置した「彫刻のあるまちづくり事業」を担当した。設置後の彫刻を市民の手で守ろうと、彫刻ボランティア養成講座を開催し、受講生により応援隊が結成されたのが平成 12 年で、これまで 15 年間毎月第 2 火曜日の彫刻洗浄が継続されてきた。応援隊の活動は、彫刻洗浄と「杜の都彫刻めぐり」ガイドのみである。札幌は彫刻の数も多く、友の会の活動も多岐にわたっている。勉強になった。

## 美術館と紅葉の自然を胸いっぱい 苦小牧・支笏湖を巡る秋のバスツアー—盛況

絶好の行楽日和に恵まれた 10 月 10 日、友の会主催のバスの旅「樽前・支笏湖アートと自然を楽しむバスツアー」が行われた。前日の爆弾低気圧による荒天が嘘のように晴れ渡り、参加 30 人が苦小牧市美術博物館で開催中の特別展「花ひらく近代洋画の世界」を学芸員の解説付きで鑑賞。ついで支笏湖周辺を巡り、恵庭溪谷の「白扇の滝」などで彩り始めた紅葉の美しさに見とれ、アートと自然の一日を楽しんだ

### 洋画の手法に挑戦した先人の苦闘に感動

大関 元規（会員）

6 月に友の会に入って初めてのバスツアーに参加しましたが、苦小牧市美術博物館での特別展「花ひらく近代洋画の世界」が印象に残っています。

友の会の役員の方のご配慮により、絵画鑑賞の前に学芸員の方から参加者一同にスライドを用いた 20 分ほどの特別説明を受けられたことも嬉しかったです。

説明の後は、いよいよ絵画鑑賞です。いやあ良かったですね。日本画しか描いたことがない画家たちが、油絵という新しい手法に挑戦して、苦闘の末に独特の洋画を描き上げた！そのことに驚きと尊敬の念が湧き上がってきました。

どんな世界でも先駆者がいて、その人たちが切り開いてくれたから、次の世代がそこから活動できるというひとつのお手本のような感じでした。このような絵画を鑑賞できたのはとても幸運でした。

### 力強い描写、色使いに感動

阿部 祐子（一般）

前日の爆弾低気圧の強い風が少しあるものの、良い天気になり、楽しみにしていたバスツアーの始まりでした。車中からは秋の色が始まっていてこれから本番を迎えるとの事でした。

苦小牧の森本レオさんのアトリエは広々とした平屋の建物で、中は手作りながら個性的な作品の展示があり、また、森本さん自身は地域に根差した活動もされているとのことで、静かな自然の中、風や空気、自然の光にめぐまれての作品作りはどんなのかなあと思ってみました。

苦小牧市美術博物館では、ヨーロッパの新しい美術を盛んに取り入れた先人の画家の作品が、力強く、描写や色使いなど現代画とは少し違って見えました。

帰路の途中で立ち寄った恵庭の滝の風景に札幌から近いこのような所に心洗われるスポットがあることを知りました。

## 羊ヶ丘「クラーク像」洗浄 清掃活動終了

今年度の彫刻清掃の終盤を迎えた10月16日、札幌市羊ヶ丘展望台の「クラーク像」の清掃が行われた。

晴天に恵まれたこの日、観光客がまばらなうちに高圧洗浄機を使ってクラーク先生をさっぱりさせようと



8時半から作業開始。ポールの上に洗浄機の筒先を固定し、遠くを指さす先生をめがけて放水すると、勢いよく放物線を描いて飛び出した水が朝の光に虹を描いた。見守っていた観光客からも歓声が沸き、クラーク像はあっという間に輝きを取り戻した。このあと、大ヒット曲「恋の町札幌」の譜面と歌詞が刻まれた石原裕次郎と作曲家・浜口庫之

助の像も水洗いしてふき取った。

彫刻清掃はこのあと同23日、道美術館協力会と共に道立近代美術館前庭の「嵐の母子像」、知事公館の「意心帰」などの彫刻を洗い流して予定を終了した。

## 友の会の案内も掲載 V-net イベント・ガイド

芸術・文化を主体にした市民ボランティア団体で組織する「V-net」（ブイ・ネット）が作成したイベント・ガイド2015年版に友の会の活動が紹介された。



ガイドはA5版をたたんだポケットサイズで、中島公園での清掃作業の様子と中島中学校の生徒と共同で彫刻を洗っている写真と共に会の活動をコンパクトに紹介している。

## 新聞への掲載相次ぐ 友の会の活動ぶり

シンポジウム2015「彫刻創る・守る」の開催を契機に友の会の活動ぶりが新聞紙面をにぎわした。

シンポ当日の10月5日、毎日新聞が「破損進む野外彫刻守れ」の見出しで開催を報じた。また、北海道新聞も11月11日「野外彫刻 進む劣化」「コンクリート製



寿命近づく」で小坂洋右記者の署名原稿。さらに同19日夕刊文化欄に黒川弘毅武蔵野美大教授の「巨匠・朝倉文夫戦時下の仕事」が木下成太郎像の保存を呼びかける記事として掲載された。先立つ6月20日、日本経済新聞も「野外彫刻ほったらかし」の全国記事で友の会の活動を取り上げていた。

## 原子修さん（友の会顧問）

## 道新文学賞（詩部門）受賞

友の会の顧問で詩人の原子修さんが第49回北海道新聞文学賞の詩部門で本賞を受賞した。受賞作は詩集「叙事詩 原郷創造」。北の自然を舞台に古代から現代までの歩みを叙事詩まとめた。（北海道新聞2015.11.11）

## 事務局日誌

▼9月15日＝札幌市市民文化部との打ち合わせ(昨年提出の市長に対する要望書への返信について)▼10月4日＝シンポジウム2015「彫刻創る・守る」開催(道立近代美術館)▼10日＝秋のバスツアーで苫小牧市美術博物館、支笏湖方面など訪問▼16日＝羊ヶ丘展望台クラーク博士像など清掃▼23日＝道立近美前庭彫刻など清掃▼11月8日＝シンポジウム反省会(中村旅館)▼12日＝定例役員会(エルプラザ)会報54号企画など協議▼16日＝学習部会(エルプラザ)彫刻地図コンテンツの現況報告

## 編集後記

▼2015年の友の会の最大行事、シンポジウム「野外彫刻創る・守る」が期待通りの成果を挙げて終了。今号はその特集的な号となった。紙幅の制限で詳細を伝えられないのが残念でもある▼2016年の新しい年。目新しい企画と編集で、会の活動をより多彩に伝えることはできないだろうか。新鮮なアイデアの発掘を今年の課題にしたい。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いづみ」 No.54

2016年1月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30)

011-884-6025

印刷 山藤三陽印刷

## 会報「いづみ」54号 目次

自作自選24《希望の種》	葦澤 淳一	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季24「彫刻美術館のことを少しだけ」	大場裕子	2
風見鶏「社会的包摂と美術館」	木村 純	3
シンポジウム2015「彫刻を守る・創る」		4
あとがきシンポジウム2015		5
友の会ニュース		6-7
苫小牧・支笏湖を巡る秋のバスツアー/クラーク像清掃/友の会の案内掲載/新聞への掲載相次ぐ/原子修さん道新文学賞受賞		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

## 本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

### 本館

#### ■コレクション展

「ふれる彫刻」 12月5日[土]～4月10日[日]

所蔵品の中からブロンズ作品を中心に展示し、手で触れて感触を味わいながら彫刻に親しんでもらう。また、地元作家による手で触れたり、遊んだりできる作品を出品。

#### ■さっぽろ雪像彫刻展2016

1月中旬開催予定

札幌雪像彫刻実行委員会との共催で市内の造形作家、学生らが雪の彫刻作品を制作・公開する。

### 記念館

#### ■ミニコレクション展

「ちょうこく動物園」 10月20日[火]～4月24日[日]

本郷新が馬、牛、鳥などの動物をモチーフに制作した彫刻などを展示。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>